
水瀬、風邪をひく

鷺嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水瀬、風邪をひく

【Zコード】

Z8031Z

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

バカは風邪ひきません。当然、水瀬がひいたのは風邪ではありませんでした。

学校で風邪が流行している。

今日もクラスの半分位が欠席し、残りの生徒も、大半がどこか気持ち悪そうな顔をしている有様だが……。

「バカは風邪ひかないっていつじやない？」

「そうね」

未亜の言葉に、美奈子は思わず水瀬・秋篠・羽山の三人を見つめてしまう。

「ど、どういうことだ？」

「言葉の通りだよ」

「ち、違う！……あ、なんか俺、熱が40度位ありそうだぞ？」

「俺なんか365度だ！」

「えつ、えつと……ぼ、僕は」

「水瀬君。いいよ、この一人につきあわなくとも

美奈子は、羽山に、『365度ってどんな熱だ！』と、内心で突つ込むだけにした。

「で、でね？」

水瀬は真剣な眼差しを、未亜に向けた。

「バカな人は、風邪ひかないの？」

「た、例えだよ例え」

「し、知らなかつた……」

『馬鹿は風邪引かない』って言葉に、かなりショックを受けた様子だ。

「いいことじやない。風邪ひかないなんて」

「それで馬鹿なんてわれたらイヤだよお

「辛いのよ？だるいし気持ち悪いし」

「うーん。でも、一度位、味わってみたいなあ

「贅沢」

瀬戸綾乃の日記より

夜、グラビア撮影のお礼としていたいた珍しいお魚を食べる。
お母さんが「調理方法がわからない」といつので、水瀬君にお願
いすることに。

お酒飲みたいので、和食にしてください。

さすが水瀬君。

お魚が次々と美味しそうなお料理に変身します。
お刺身にお鍋に……うん。おいしい。

食卓で学校のことを聞くと、風邪が大流行していて、明日から学
級閉鎖されるといいます。

みんな、大丈夫かしら。

ルシフェルさんまでダウンしたといつから、多分、よほど質が悪
いんでしょうね。

「悠理君は大丈夫なの?」

「僕、風邪、引いたことないんです」

「それは健康ですね」

お父さんは感心したように囁つねび、心配。

「大丈夫ですか?」

そつと額に手を当ててみる。

……
え?

「悠理君?」

「何？」

私、救急箱から体温計を持ってきて水瀬君の口に突っ込みます。歯が折れたみたいで、気にしてはいけません。

ピッ

39・5度！？

すぐに私のベッドに悠理君を放り込みます。

悠理君、私も初めてですから、優しくしてくださいね？ 服を脱ぎかけて、お母さんこ「違うつ！」で止められました。そ、そうですよね。

少し錯乱してしまいました。

「び、どうしたの？」

悠理君は、突然のこと驚いていますけど、この熱で平気な顔している悠理君に、私たちも驚いています。

「いいから寝ていなさい。明日、病院行きますよ？」

氷枕を持ってくれたお母さんが諭すように言つてくれましたが、悠理君は理由がわからないようで、きょとんとしています。

「何でですか？」

「風邪です」

「え！？ ぼ、僕、風邪、引いているの？」

「うれしそうに言つもんじゃありません！ いいですか？ 病になるってことは不幸です。不幸をうれしそうに言つなんて、恥ずかしいことだと思いません！」

「そ、そなんだ……」

お母さんに怒られた悠理君は、不思議そうな顔で言いました。

「特に変な感じはしないけど……」

「それでいいんです。綾乃？ あなたも風邪薬飲んで、早めに寝なさい？」

「で、でもお。お酒……」

「ダメです。病人は寝てなくちゃ」

「せめて玉子酒……」

「今は寝るのが一番です。ひき始めが肝心なんです」

「ううつ……お酒、玉子酒……わかめ酒」

瀬戸 由里香の口記より

まつたぐ。

悠理君、熱があるせいか、ボケが進展しています。
でも、よつによつてわかめ酒？

さすが由忠さんの子。

血は争えないわ。

そういうえは、私も、昔、昭博さん相手に少しだけ……あやつ（は
あと）

でも、悠理君、誰相手に？

興味は深々。

部屋の向こうから

「誰相手に飲んだんですか！？」

綾乃の詰問が飛んでいますから、白状するのはすぐでしょう。

多分、あの禱子さんって人だと思いますけど。

その間に、遙香さんに連絡しておきますか。

……わかめ酒……今夜、やってみよつかしら。

瀬戸 綾乃の日記より

あの禱子つて人、どういう趣味の持ち主だったのかしらー…？

14歳相手にわ、わか……

あーつもうつ！

許せませんつ…！

近衛は反逆者として、今からでも処刑すべきです！

私が椅子処刑に向け息巻いている間に、お母さんが悠理君の実家に電話してくれました。

お義母様も驚いたそうですが……

「風邪がうつるのではないかから心配しなくていい」といわれました。

ですから、夜、こつそりと添い寝してあげました。

悠理君は、ずっと寝続けています。

寝顔を見続ける私

オトコの子と同じお布団で眠るなんて、初めての体験でドキドキします。

悠理君、体調が体調ですから、それ以上がなかつたのはとても残念ですけど……。

そして翌日。

悠理君は、ルシフールさんが心配だという理由で、朝、自宅へ戻りました。

体調が、朝になつたら悪化した様子で、『ご飯を食べませんでしたから心配です。

私も午前中はお仕事があります。

心配ですけど、オトコの子ですもん。大丈夫ですよね？

早く良くなつて下さいね。

悠理君。

「はいOK！」

その一言でほっとします。

さて。楽屋に戻りましょ。

すると、スタジオの入り口に、背広姿の方が5人位立っています。

普通の仕事の方ではないようです。

田を合わさないように横をすり抜けようとして、止められました。

「瀬戸、綾乃だな？」

「え？ は、はい」

無言で出されたのは、普通の人は見慣れない手帳。

近衛府の人です。

スタッフの人も、関わらない方がいってわかつてているみたいで
す。

近衛府の人がいいます。

「君を徵発する。我々と共に来てもらおう」

ドカンッ！

ドカンッ！

ドカンッ！

連れて行かれたのは、なんと水瀬君の家。

不思議なのは、何度も爆発音が響くことです。

「あれ？ 瀬戸さん

車が止まつた側には、なんと光信君がいました。

「どうしたんです？」

「ああ。学級閉鎖つていうから、水瀬の所で酒
来たんだ。さつきお袋さんから事情は聞いた」

いや、遊びに

石段の側にいたのは、お義母様。

相変わらずお綺麗です。

「あら？ 連れて来て下さつたの？」

「どうということです？」

「悠君、ちょっと厄介なことになつてねえ……

「？ な、何か悪い病氣にでも…？」

「ううん。ほら、あの子、成長が遅いから忘れていたんだけどねえ……」

「お義母様！」

「大丈夫。数日すればケロッとしているはず。ただ、その間、アレが続くのよ」

すさまじい爆音が悠理君の家から響きます。

「な、何ですか？」

「魔力の制御が効かなくなつて、ヘンな形で流れているの。そのせい」

「あの爆発ですか？」

「そう。クシャミする度に攻撃魔法が発射されてるのよ。ビル1個丸ごと吹き飛ばすようなのが」

「ビル1個、ですか？」

「屋根が吹き飛んでいるから、あれ以上、建物が壊れる心配だけはないけど……」

「全く。あいつは他人に迷惑をかけなければ風邪一つひけんのか！？」

光信君、そのじ意見、じもつともです。

「とにかく、その対策として、あなたに悠君の面倒みてあげて欲

しいの。マスクは押さえますから心配しないで」

「は？」

「あの子の攻撃魔法に対抗できるのは、世界であなただけだから」

「あの、そういうの、むしろお義母様が」

「私がここにいる理由は、別に綾乃ちゃんを出迎えたわけじゃないのよ？」

「え？ ま、まさかお義母様でも？」

「そう。だから、妻たるあなたの出番です」

「わ、わかります！ 妻の出番、なんですね！？」

でも私、魔

法なんて使えませんよ？」

「意識的には、ね」

「？」

「ちよっと細工はしてあげます。田をつむって」

田をつむった途端、お母様の指先が額に当たりました。なんだから、全身が熱くなります。

「はい。いいわよ」

お母様の声で田を開けますが、なんでしょう。体が軽くなつたよう……。

「これで大丈夫。部屋についてから、羽山君の携帯電話に連絡して頂戴。必要な物資を持つていくから」

私は思いきつて、一気に悠理君の部屋を田指しました。怖いと思うから怖いんです。

怖くない怖くない。

待つてているのは夫。

そうです！

事態を変えられるのは、妻の愛だけなんですから！

水瀬遙香の田記より

案の定、悠君の魔力暴走は、綾乃さんのおかげで中和現象を引き起こし無力化。

事態はこれで一気に沈静。

部屋に戻つたら、悠君、ぐつすり眠つていました。

ふふつ。

この無邪気な寝顔、相変わらず。

必要な手配は全て済ませ、お友達のお見舞いにも立ち会いました。母親として、こういるのは初めてですが、お友達が息子を心配して訪ねてきてくれるなんて、うれしいことですね。

……まあ、お友達は、「風邪」といいますが、実は私たちにとっては、「小児麻疹」みたいなものだということは、言わないでおいてあげましょ。

感染するものではありますんし。

綾乃さん、本当に甲斐甲斐しく働いてくれます。
やっぱり、綾乃さんでなければ悠理の嫁は任せられませんねえ。
本当に、こういう娘が欲しかったです。

……陛下のバカ。

悠理は女の子してくれつてあれほど頼んだのに

今更、言つてもしかたありませんね。

後は綾乃さんに全て任せることにして、私は、由忠さんとの情報攪乱の進捗を確認に行きますか。

水瀬由忠の日記より

全くあのバカ息子めが！

綾乃ちゃんの能力を使わなければ、病氣一つできないのか！？

だいたい、遙香も遙香だ！

綾乃ちゃんが全ての仕事をキャンセルして、3日も行方くらませたなんてネタを潰すのにどれだけ苦労するか考えてみろ！

報道管制がまして、それっぽいガセネタで攪乱して、綾乃ちゃんそつくりな代役用意して弁明会見、……、こういう時役立つ息子がいないじやないか！

また本部に泊まりだ。

いかん。

かすみに、今夜のデートのキャンセルをメールしなくては……遙

香！？いつからここに！？何！？し、知らん！かすみなんて女は！

こりつ！首根っこ掘むな！

悠理！

すべてはお前のせいだ！

覚えていろよおつ！？

……ぎやあああああつ！？

ルシフール・ナナリの日記より
目が覚めたのは9時過ぎ。
いけない。

水瀬君に、私が今、博雅君の家にお世話になつていて、連絡するの忘れてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8031z/>

水瀬、風邪をひく

2011年12月25日19時53分発行